

## 第2回 安曇野市文化財保存活用地域計画策定協議会会議録

1	協議会名	安曇野市文化財保存活用地域計画策定協議会
2	日 時	令和6年3月26日(火) 9:30~11:30
3	会 場	安曇野市役所本庁舎 306 共用会議室
4	出席者	笹本正治会長、梅干野成央副会長、幅谷啓子委員、百瀬新治委員、馬々洋介委員、加藏友美委員、佐藤亜希子委員
5	市側出席者	文化課長 三澤新弥、文化財保護係長 堀久士、文化財保護係 斉藤雄太、山下泰永 支援事業受託者(株式会社KRCあづみの事業所) 環境計画室長 藤村忠志、環境 計画室 長尾山音
6	公開・非公開の別	公開
7	傍聴人 0人	記者 0人
8	会議概要作成年月日	令和6年4月3日

- 1 開 会
- 2 あいさつ
- 3 議 事

### (1) 今後の進め方と経過報告(資料1・2)【事務局より資料の説明】

委 員：資料に「生業の変遷を語り継ぐ農家民家群と屋敷林」とある。大変嬉しいが、「農家民家群」とあると、町屋などが切り捨てられてしまうのではないかと思う。農家という言葉を入れなくてもよいのではないか。必ずしも屋敷林とセットではないかもしれないが、そう思った。

会 長：今のような意見をたくさんいただければと思う。

知っていることをみな持ち出して、できるだけ出してほしい。私のように外側にいる人間と、内側にいる人間ではずいぶん意識が違うはず。日常生活の中に文化をどのように認識しながらどうやってつくっていくか。問題は、目指すべき方向性や将来像であるため、現状より、未来である。皆さんには委員に委嘱された以上、活動してもらわなければならない。

### (2) 市民向けアンケート調査・ワークショップについて(資料3~7)【事務局より資料の説明】

会 長：アンケート案について意見を出していただきたい。

今までの説明でよくわかるが、安曇野市は、風景が良いとか、自然環境が良いとか言われているが、その背後には人間が住み、歴史や文化があることを認識していない市民が多いと感じた。今回のアンケートでは、私たちの意識を訴えかけたいと思っている。文化庁が言うような文化財的なものだけが文化ではなく、もっと日常的なもの、皆が大事にしたがっている風景も文化があって成り立つことを入れたアンケートにしていきたい。そういう目的に合致するアンケートにするにはどうすればよいか、ぜひ皆さんのご意見を伺いたい。

例えば、資料の過去のアンケート調査の結果では、市民の意識として、文化・芸術は極めて低い位置にある。それは市民の皆さんが文化に対して、文化庁的な意識しか持っていないからではないかと思う。私たちが日常的に食べている食物も文化。それを意識するようどう伝えていくか。私たちが今後考えなければならないのは、将来の安曇野の目指すべき方向性や将来像、10年100年先にはどうあるべきかである。私はこのアンケートを未来に向けた、

心を揺さぶるようなものにしていただけることを期待している。

また、資料では「地域の宝」と表現されているが、これで本当に良いのか。宝と聞くと、お金で換算されてしまうものがイメージされてしまうのでは、と気になっている。一方で「文化財」と言っても理解されない。例えば、「地域の宝」の後ろに、「あなたが大事にしたいもの」など、もう少し違う説明を加えたらよいという感想を持った。今回のアンケートは今後の私たちにとって大事な部分になるため、色々な意見を言っていただきたい。

委員：「地域の宝」という言葉は、非常に良いと思う。私は今まで『宝シリーズ』を読んでいるから、宝のイメージが文化財として具体的に結びつく。

今回策定する文化財保存活用計画で、「活用」という言葉に少し引っかかるものがある。国から言われている感じがする。例えば、道祖神や土地神様に手を合わせたり、周りの掃除をする、そういう心の豊かさや静かな環境を安曇野の宝だと思う。あまりにも身近にありすぎて気づいていないのでは。日本人は無宗教と言われるが、モノに魂が宿っているということに対して当たり前で過ごしている。安曇野はとても豊かな時が流れていると思う。漠然としているが、静かに手を合わせる環境を守っていききたいというのが私の一番の思い。

会長：それをアンケートでどう活かすかが問題である。例えば、「あなたは道祖神を見たら手を合わせることがありますか」という設問があるか、ないか。アンケートを通じて何を訴えたいか。この設問があれば、手を合わせることも文化だという気づきになると思う。

このアンケート案には日常生活が出てこない。七夕やお盆行事、各家、個人でやっているものが出てきていない。どうしても「文化」と言えば、「文化財に指定されたもの」という文化庁の発想になり、これを疑問に思う。委員のご意見をもっともだと思う。当たり前のように「近くにある道祖神に手を合わせたことがあるか」、「掃除をしたことがあるか」、という設問を入れてもらえるとありがたい。あるいは、「お盆の行事を家でやっているか」など。

質問群 B の表現に「あなたが国内外から訪れる人たちに自慢できる」という表現があるが、この表現でよいのか。観光が目的になる形にはできればたくない。私たちが文化を認識するのは私たちのためであって、観光のためではない。国内外から訪れる人に自慢できるという表現は、方向性が違ってくるのではないかと感じた。

皆さんどうぞご意見をお願いしたい。きちんとしたアンケートが作れるか作れないかは、我々の責任である。

委員：一番大事なことは会長のご指摘のとおり、今後に向けてどういう方向性をもって自分たちが今考えているのかだと思う。そのあたりを後ほど話をさせていただくが、現在の文化財を取り巻く状況をどのようにするかに対して、特に地域の人たちや直接関わる人たちが見方を変えるだけでも、かなり先に見えるものは違う。アンケート案の一つ一つのことは特に言うことはないが、先々を考えると、中学校2年生のアンケートに対しては、そのあたりのことを気にかけてほうがよいと思う。

会長：このアンケート案はよくできており、世代を超えて作っていただいているが、設問が多くなればなるほど回答する側としては嫌になるので、回答率は下がる。そのあたりを含めて考えたい。

アンケート案では「興味がない」という選択肢を設けているので、「どうしたら興味が出るか」という設問があってもよい気がする。

委員：「将来に向けてどうするか」という文章などの方向性が大事だと思う。

会長：「文化財」と言われると、「指定されているもの」をイメージしてしまい、頭の中が固くなってしまいます。道祖神に手を合わせたり、掃除をすることが本当は安曇野の宝である。そういうことを気づかせてくれるアンケートができないかが私の願いであり、それにより安曇野らしさとは何だろうと考えさせてくれるはずである。皆さんからご意見をいただき、安曇野市はちょっと変わったアンケートをしていると言われて初めて価値がでてくると思う。

委員：未来志向というところはとても重要なポイントであると思う。中学2年生もそうだが、保護者に聞くのも大きな意味があると思う。例えば、9月末の穂高神社の御船祭りでは、夕方になると子どもたちがお囃子の練習をしている。御船祭り本番は平日のときが多く、参加する子どもたちは学校を休むことになる。習い事と両立させながらお囃子の練習をする子もいる。家庭にもよるが、子どもの意思を尊重するのか、保護者の意見になってしまうのかということがあると思う。参加したことがある、ないではなく、どうすることで保護者が子どもを参加させたいと思うのか。興味はあるが、受験や送り迎えなどが難しい場合があると思う。そこをフォローできれば参加者が増えると思う。

委員：今の人たちにとっては、習い事のピアノに行くことは文化的だと思うが、お囃子は文化的ではないと思っているのではないか。学校で学んでいることが文化であり、それ以外のものは文化ではないと。

お船祭りの説明に「安曇野はお船祭りの勇壮な船のぶつかり合いで代表され、観光客が訪れる」とよくパンフレット等で謳われているが、そもそも観光客が来るという発想は、私は間違っていると思う。それを解決するには「あなたは地域のお船祭りに参加していますか」という設問があれば、お船祭りに参加することも立派な文化活動だと思えるようになるのでは。各地域でお祭りが縮小しており、参加募集をしなければ人が減ってきている。華やかなものには人が集まる。フルートをやっているとすごくよいと思うが、一方でお囃子をやってもあまり文化的だと認識していない。そこを変えていくためにも、アンケートの中に少しずつ落とし込んでいきたい。

私は南信州伝統芸能継承推進委員会のアドバイザーを務めているが、南信州は国や市町村の立派ないいお祭りがある。企業に協力を依頼し、お祭りに参加するときは公休にしたり、寄付金をお願いするなどして、既に100社くらい集まった。南信州ではお祭りが大事であるという認識を深めるために、色々な組織を作り上げている。お囃子やお船祭りに参加したことがあるかという設問を入れるだけでも、大事だと思う。

委員：子どもたちの保護者の世代が非常に重要なポイントだと感じている。抽選に漏れてしまい残念という小学生が続出するほど、豊科郷土博物館友の会の宝探し部は人気である。その理由として、手ごたえとして感じたのは、自分で火打ち金と火打石で火おこしをして、イモやマシュマロを焼いて食べようとしたとき、最初に火がついて、マシュマロが焼けてそれを口に頬張った小学生が「美味い！お父さんありがとう！」と言ったこと。その瞬間にお父さんはまさに全体のヒーローになった。お父さんがお父さんとしての仕事ができ、子どもとの関わりをもつということの体験から、そういうご縁が広がって、今の状況になっていると思う。

会長：今回保護者を対象としたアンケートも予定している。保護者に子どもとの話を勧める機会にもなるとよいと思う。

副会長：何点かある。アンケート冒頭の教育長の文章がかなり重要になってくると思う。日常にあ

る当たり前のものは大事なのだということを含めて、入念に書いていただくのがよいと思う。アンケートを通して、市民に大事なことはこうだと伝えていく。市民にも色々な属性の方がいる。安曇野に惚れ込んで来ている人や、Uターン・Iターンで来た人もいる。属性によって、文化財の見方は全然違ってくるのではないか。それぞれの属性によつての文化財の見え方、大事なもの、そういうものが浮き彫りになると、それに対しての対策も打ちやすいのではないか。安曇野にある当たり前のものとは何なのか、それを再認識していただくことが大事で、当たり前のものを維持していくことが難しく、努力が必要である。それを市民の方と一体になってやっていくのが今回の計画の趣旨だと思うので、努力をしていく上で必要な情報は集めたほうがよい。あとは、率直に「未来に伝えたい安曇野らしい風景は何ですか。」というところから入って、回答者に気づきを与える意味でも、「それを構成している宝物は何ですか。」という設問でもよいのではと思った。

会 長：アンケートの実施には、全職員を対象とすべきだとずっと言っている。安曇野市の職員が頑張らなければならない。市の職員の意識も違ってくるだろう。

委 員：景観が安曇野の大きな財産だと思っていて、それが構成されるのは屋敷林や民家などの建築群が、私の中では大きな位置を占めている。一方、「文化財」と表現してしまうと、特別のものと考えられてしまうので、「宝」や「私の好きな」という表現がよいと思う。民家等も含めて、価値のある建物がたくさん残っているので、この質問の中にそういうものを皆で守っていけるような質問があってもよいと思う。指定文化財でないものも含め、市民が協力してまとまっていけるような切り口のアンケート案にしていだければと思う。

会 長：アンケート冒頭のあいさつ文等、いろいろ手直しをしながら、よりよいものに変えていく。安曇野市の場合は文化財的なものだけでなく、もう一回足元に目を向けてみましょうという方向性を持っていく。将来の文化を作っていくという方向性にしたい。私たちにとって当たり前のことをもう一度ささやかでもよいから認識してもらえるようなアンケートにしたい。

会 長：では、ワークショップ案について質問はあるか。

基本的には、委員の皆様には場合によっては講演等を手伝ってほしいということである。個人的に言うと、ぜひ明科でやってほしい。もともと東筑摩郡の明科地域が知られなくなっている現状がある。

実際の運営にあたっては、できるだけ皆さんにご協力をいただきたい。

### (3) 意見交換

会 長：100年後、200年後の文化はどうあるべきかを前提にしながら、未来に向けての活動について意見を出していただきたい。何を残していきたいか、育てていきたいか、どういうふうな安曇野の未来を考えていくかが大事である。ここではフリートークという形で意見交換をしたい。ある程度まとまれば、アンケートだけでなくワークショップその他にも活かせると思う。

委 員：国重要文化財の曾根原家住宅の実際の管理は、ご高齢の女性が一人でやっているのが現状。今後の管理が課題と聞いている。穂高には、長屋門が市の指定文化財になっている等々力家があるが、門が閉まり閉館した状態。なんとかならないのかと思っている。また相馬家の洋館など、安曇野にはたくさん良い所もあるが、将来的に公費をかけて維持できる場所はものすごく少なくなってしまうと思う。50年後、100年後どんな形で、大切な財産を市民で

守っていくか。これが、安曇野の常識みたいな形になるようなアイデアはないのか。屋敷林も同じで、市が守るのではなく、市民が守るようなスタンスやシステムを狙い、100年後の安曇野市のプランをつくれればよいと思う。

会長：今の問題は非常に大きい。例えば、100年後にそのままの家に住みたいとは思わない。熱効率も悪いし、どこでもそうだが古いお宅の横に新しいお宅を作ってそこに住んで、古いお宅は残しておく程度である。それを市民の皆さんの力でやっていくためにはどうすればよいか。風景の中に古い建物をどのようにして守っていくかが重要になる。ヨーロッパや海外をみれば、まちが新市街と旧市街に分かれており、旧市街では古いことに価値があって、ドイツあたりでは古い家が集まっているところのホテルは数年先まで予約が集まっている。むしろ古い所に住めることに価値がある。日本ではどちらかというとそういう価値観はないため、逆に新たな価値観をつくりながら、残すべき風景や建物をいかに守っていくかが今後の課題である。ただ、それも問題がある。今の世の中でよりよい建物をづくり、それもまた風景の中に溶かしていかなければならない。単純に古いものだけを残すということでは到底成り立たない。広い視野で景観論からきちんと建物を考えていくと、それが安曇野の大事な文化になると思う。

副会長：昨年度と今年度文化庁からの要請のもと、近現代建造物緊急重点調査が全国で実施されている。近現代建造物とは戦後の建築である。1945年以降の建築で、守るべき大事な物は何か、必死になって文化庁が調査を始めており、長野県は比較的早いタイミングで調査を始めた。建築の分野ではこういうものも保護の対象として取り組み始めている状況である。

先ほどのご意見をお聞きし、本協議会で早くアクションプランの議論を始めた方がよいのではと思った。ワークショップとアンケートを実施後、守るべき対象が見えてきたら、それを守るために、市役所としては庁内横断で何をやっていかなければならないのか。おそらくこの文化財関係部署だけでは絶対に解決しない。順次調整していただき、市役所としてやるべきことは何なのか、市民としてやることは何なのか、その他文化財保護に関わる団体がやるべきことは何なのか。当然団体同士をつなげる窓口もつくっていかなければならないし、人材育成もしていかなければならない。そのアクションプランの中で、重点的にやっていくべきこととそうでないものがあると思うが、できれば早い段階からその議論をしていければよい。

会長：すごく大事なことで、安曇野市はコンパクトなので、庁内の横断が可能であるはず。安曇野市の博物館協議会の責任者をやっているが、安曇野市は必ず動いてくれる。美術館も博物館も文書館も同じ部署である。大きな行政だとこうはいかない。逆にコンパクトな市であることを上手く利用して、横に連動し前に進むことである。

100年後を考えるのであれば、現状認識の向こうにどうなったらよいのかということ、具体的にそろそろ論議すべきではないか。とある自治体の博物館では、建物ができる前に市民活動がどんどん動き、市民活動の動きそのものが博物館となっている。行政がやっていかなければならないのは建物だけでなく、市民の活動をどうやって支えるかである。

先程、お祭りの継続についての話題があったが、100年後にも地域のお祭りが存続していることが大事であり、そのための具体的な活動の計画を作らねばならない。お祭りや建物のような目立つもの以外に、道祖神に手を合わせるということが重要であるということ私たちがはたかく忘れがちだ。必ずしも古いものだけが重要ではない。私たちが文化をつくるときに、次

の時代にどうしたら子どもたち、孫たちがこの安曇野に愛着を持って来て、道祖神に手を合わせてくれるような人が増えてくれるのか。今の世の中、どちらかというとお金に換算する話ばかりになってしまいがちだが、安曇野市ではそのあたりを含めて考えていきたい。

委員：岩原の山神社では、安曇野のお船祭りで唯一の担ぎ船である。将来に向けてのチャンスということでやっている。この1年の中で役員の5人ほどでよく考えたら、自分たちがやっていることに非常に意味がある、ということに気づいた。先日の決起集会の意味も込めた総会で役員が声をかけてくれたことも大きいですが、20数名担ぎ手を集めることができた。また、マスコミの報道で、そういうことなら参加をしたいという方が約10人、一番遠い方は長野市からぜひお船を担ぎたいという申し込みがあった。まだやってみなければわからないこともあるが、少なくとも青息吐息から、自分たちのお祭りを継続していこうという意識に変わりつつある。

会長：安曇野市で一番残したい、育てていきたいものは何か。

委員：安曇野に人はどのくらい住んで牧歌的生活を営んでいるか、農業で水田や畑はどうなっているのか。農業の発展はあるのか。そういうことが気になる。

会長：すごく大事である。たくさん人が住めば都会化してしまう。一方で、今皆が好きな安曇野の風景を残そうとするためには、農業をどうやって育てていくのか。工業ではないと思う。安曇野の将来を考えると、人はどのくらいが適正と考えるのか。江戸時代の人口から考えたら、今は人が多すぎる。しかも一定のところは一極集中になっている。安曇野は今後どんどん人が増えることを想定する市になるのか、今のような風景を維持するためには考えなければならない。100年後、200年後の将来像を描くときに、もし今のような景観を大事にしようとするのであれば、農業政策にできるだけ力を入れていただいて農業の風景が残るようにしなければならない。しかし、お金儲けという面では工業化の方が良い。工業化を選択したときに、私たちは安曇野の宝として感じている水や風景や空気をどうするのか。逆に言うと、私たちの未来をどういうふうに変えていくかが重要である。農業はアグリカルチャーで、カルチャーの代表である。しかし農業について聞くことはほとんどない。おそらくこれからの気候変動で食べ物が作れなくなったとき、自分のところである程度食べ物を作れる方がずっと得である。そういうことも考えていきたい。

委員：景観というキーワードが出たとき、山があって、条件が整った屋敷林というものも観光客から見ればとても魅力的で素敵なものである。一方で、穂高駅前がシャッター街のようになっている。あれは観光客から見れば安曇野の今の姿、今の進行形の文化である。過去の遺産による文化、今も脈々と続いていたり創り上げられたりする文化もあり、そのバランスというか、よいものをよりよく活用することも大事だが、それだけでなく、景観や風景とのバランスが難しいと感じる。

会長：今の話もすごく大事であり、安曇野の風景がよいと皆言うが、見る風景はもちろん北アルプスを見た場合でしかなく、つまり借景である。自分たちには関係なく、遠くの山を借りているだけである。これだけ松くい虫の被害があっても、反対側の東山には見向きもしないような都合のよさが私たちにはある。長野県の主要なお寺は、どちらかというとお修験道的な要素があるが、この東山地域は高い山でないところにお堂が多く、里山のレベルの信仰である。里山を保存しなければ水もよくないし、色々なものがダメになっていく可能性がある。しかし、近年の我々はどうしても目に見えるものや、お金儲けになるものに目を向けがちだが、

そうでないものは、完全に放置されてしまう。農業も大規模にやれば儲かるが、小規模だと儲からない。結局は経済の論理になってしまうが、むしろ身近にある道祖神に手を合わせたりすることの方が大事だと私は思う。私たちが今視野を広げないと、いつまでたっても同じパターンで、常念をバックにおいた安曇野の風景、屋敷林が点在する風景はよいが、よいとすればそれを 100 年後まで残すために何ができるのか。だからこそアクションプランを考えるとここにきていると思う。

委員：指定文化財に未指定のものを追加していくことも大事なことだと思うが、これは文化庁の方針なのか。文化財はどんどん増えていくことになる。今指定されているものだけで約 200 件ほどある。新しく掘り起こすことにも意味があるが、そうではなく今あるものを丁寧に見つめ直すということにも価値があると思う。一つのことを深く掘り起こす方が、重みが増すのではと思う。

私は郷土博物館の友の会の郷土史部所属でここは大人だけであるが、宝探し部では子どもたちが活発に参加し、上手くいつている例だと思う。宝探し部の保護者の意見も聞いてみたい。

私が一番ありがたいと思っていることが、『宝シリーズ』を執筆・刊行できる文化課があることや、各地区で区史等が発行されるほどの公民館の活動が活発であること。『真鳥羽堰のあゆみ』という冊子がある。地域の方から「水は命の源だから、その土地に住むには水の歴史を知って住みなさい」ということで渡された。こういうものを一個人、一地域が発行できることこそが安曇野の宝であると思う。市民や文化課が保存していくべき文化であると思う。

会長：我々もしっかりと足を止めて見ていかなければならないという、非常によい警告であると思う。市町村の文化財は、文化財の審議会のレベルによって全く異なる。それは合併前の旧町村地域でも雰囲気は異なり、一律でない。植物の先生がいる所では植物の指定が多く、古い建造物の専門家がいる所はそうなる。これをどういうふうに一律にしていくかも今後の大きな課題である。同時に、文化財は毎年増えていくが、その維持が大変な状況である。今は法改正の流れで、観光その他で儲けて、自分たちで修復していくという流れである。文化財になっているお宅を維持するために観光地化できるのはごくわずかである。にもかかわらず、今まで自分たちの責任と誇りを持ってやってきたことができなくなってきたという状態で、私たちは文化財保存活用地域計画を作っていかなければならない。今までのように数が多ければよい、指定が多ければよいというわけではなく、どういうふうにしたらよいのか考えなければならぬ時期に来ている。全てを守ることははっきりいって不可能である。日本の文化は歌舞伎や能など、あれだけ栄えたはずのものでも、多くの人が生まれている昭和の時期の日本を代表する文化ではない。未来に向けての文化作りもしていかなければならない。いつまでたっても過去の遺産でやっていく状況ではない。安曇野市にとって未来へと続く宝物を作り上げていくことも文化財保存活用地域計画に入れ込んでいきたい。どちらかという私たちはどうしたら守れるかという、後ろの方ばかり気になっているが、前の方はどうなのだろうかという、夢を語れるようにしておかないと、この計画は実行性をもたなくなる。自分たちの視点を少し広げながらやっていきたい。『安曇野風土記』も私が書いているが、普通の人が当たり前でない部分に目を向けてほしい、という願いが私の全ての出発点であった。皆さんもそれぞれの視点で足りないことや、こうしたほうがよいというようなことを言って

いただければよいと思う。今後ともよろしく願いたい。

#### 4 今後の予定ほか

会 長：最終的に安曇野市が将来どうなっていくべきか、どうなってほしいかというところに関わってくるため、アンケート案に一言でも意見をいってほしい。よいアンケートにしていきたいと思う。引き続きご協力をお願いしたい。

副会長：私個人からの強い要望である。地域計画の意味を考えると、文化財がいかに文化財から脱却していくかが大事だと思う。今日の議論を聞いていても、当たり前であるものに安曇野らしい文化財の価値がある。安曇野の文化財を見ていくと、多分に農業や水利用、我々の日常生活と密接に結びついたものであり、教育委員会の文化課だけでなく、農政や都市計画、活用を考えると観光の分野など、なかなか難しいことであると思うが、従来の縦割り型の行政の在り方から脱却をして、いかに庁内横断的に地域計画を作るかが大事であると思う。安曇野らしい地域計画はそれができて初めて実現すると思う。今後の予定の中にも庁内PTというのがあるが、そのあたりを活用していただきながら、どんどん他の部局を巻き込んでいただき、皆で文化財を文化財としてみるのではなく、いつのまにか身近にある当たり前のものとして意識づけしていくかということになる。

会 長：場合によっては副会長を席にお招きし、庁内会議を開催してもよいではないか。国から言われたとおりしかできないのであれば、地域はない。地域があって、国ができる。本来の発想が逆で、どうしても国から県、県から町村へという形態になっている。文化財一つとってみても、国の国宝・重文だけになってしまう。我々が作らなければならないのは、安曇野の未来であり、基本をなす市役所では、横断的に様々なことができる形でやっていただきたい。特にアグリカルチャー、農業こそが文化の基本だということが日本では完全に忘れられていることをもっと訴えかけていかなければならない。安曇野の用水から始まり、田んぼの在り方などをきちんと確認してやっていくことが重要であるため、いまの副会長からのご意見をできるだけ重要視していただきたい。

できるだけ皆で意見を言い合いながら、次の100年200年の安曇野がよくなるように、私たちが夢を語れるということに楽しく関わられるようになればと思う。引き続きよろしく願いたい。

#### 5 閉 会